

## 1 研究の内容

### (1) なぜ社会的論争問題を扱うのか

本校「社会」部では、学校教育における「社会」の学習は、様々な立場の人が幸せになれるような社会のあり方を考えていく教科だと捉えている。そのためには、社会的論争問題を学習材とする必要がある。世の中には、様々な立場の人がそれぞれ大切にしている価値観があり、それに基づいて様々な主張を行うが故に対立がおきるからである。

### (2) 様々な立場の人が幸せになれるような社会のあり方を考えていくために必要な資質・能力

社会的論争問題について考え、様々な立場の人が幸せになれるような社会のあり方を考える資質・能力が、本校で定義する「政治的リテラシー」である。

2014年にイギリスのシティズンシップ教育の中心的存在であったバーナード・クリックが作成した『『政治的リテラシー』の樹形図』や当時の「市民」部が作成した「公共性リテラシー」から、「政治的リテラシー」の要素を抽出した(資料1)。そして、研究を重ねる中で、「政治的リテラシー」の例として、「自分の考えをさらに広げ・深め・高めることで判断する力」、「社会で何が起きているのかという現実の問題点に自ら関心を向けることができる力」、「社会を批判的に見ることが出来る力」、「根拠に基づいた判断力・意思決定力」、「自分の価値観を柔軟に変えられる力」というのも見えてきた。

- |       |                                                        |
|-------|--------------------------------------------------------|
| i …   | 社会的事象や時事問題の対立点、論点や、それらの背景となる基本的事実を理解する。                |
| ii …  | 社会的事象や時事問題の対立点、論点について、多面的(他者の視点)な見方で考え、自分の考えへの反論を想定する。 |
| iii … | 読み取った情報・知識を、自分の主張の根拠にして聴き合い話し合う。                       |
| iv …  | 様々な立場の人が幸せになれる条件を考えて決定する。                              |

資料1 「政治的リテラシー」の要素(2014)

では、様々な立場の人が幸せになれるような社会のあり方を考えていくためにはどうすればよいか。そのためには、社会的論争問題を学習材とし、様々な立場の人が幸せになれるように考えていくことが必要である。

### (3) 本年度の研究

2017年から、社会的論争問題を学習材として授業を進める際に、子どもたちの多様な考え方の背景にあるものを「判断の規準(基準)」とし、それらを明らかにすることで、様々な立場の人が幸せになれる条件を考えることができるようにしてきた。そのように取り組むことで、「政治的リテラシー」を涵養する学習過程が見えてきた。昨年度は、具体的な「判断の基準」と概念化された「判断の規準」を区別したり、関連づけたりする学習を意識してきた。

それらを踏まえて、今年度の研究の重点の1点目は「政治的リテラシー」を涵養する学習過程を練り直すことである。2点目は、「判断の基準」と「判断の規準」について、普段の「社会」の授業から意識して取り組む事である。

#### ① 社会的論争問題学習を通して、「政治的リテラシー」を涵養する学習過程

はじめに、「社会」部で考える「観点」、「判断の基準」、「判断の規準」とは何かを説明する。社会的論争問題について考える際、様々な視点から様々な立場の人が幸せになれる条件を考えていく。様々な視点を、「観点」とする。その「観点」について、自分自身はどのように考えるか。つまり、既習や生活経験が基となった判断を「判断の基準」とする。「判断の基準」の奥に潜んでいる価値や概念等を、「判断の規準」と捉えている。

次に、「政治的リテラシー」を涵養する学習過程を、子どもたちが八ッ場ダムの建設の是非という社会的論争問題について考える授業を例に説明する。

(ア) …最初は子どもたちの思いを出させていく。その際に、教師は子どもたちそれぞれの主張をコー

ディネートする中で、「観点」を見出していく。

(イ) …子どもたち同士が対話を重ね、主張の根拠を聴き合う。すると、利水面という「観点」では「ダムは私たちの水を得られるから必要である。」や治水という「観点」では「大雨が降った時には上流で水を貯め、下流域の洪水を防ぐから必要である。」、自然環境という「観点」では「豊かな自然を壊してしまうから造る必要はない」とそれぞれの「観点」ごとの「判断の基準」が明らかになっていく。これらの(ア)(イ)は、いわば「つかむ」段階である。

(ウ) …その後、子どもたちは、例えば「利水に関しては、現時点の配水状況はどうか。今後水使用人口は増えていくのか」等と根拠を調べ、対話を重ねていく。その中で、利水という「観点」の「判断の基準」には、快適な生活を過ごしたいという価値や概念等、つまり、「判断の規準」があるということ、また、治水という「観点」の「判断の基準」には、身の危険を守るという「判断の規準」があるということが見えてくる。この段階は、「追究する」段階にあたる。

(エ) …クラスの人々が納得できるかどうかの対話を繰り返していく中で、様々な立場の人が幸せになれるような「判断の規準」をつくり、多様な考えの中から、自身はどのように考えるのかを明らかにしていく。いわば「いかす」段階である。

(エ) …クラスの人々が納得できるかどうかの対話を繰り返していく中で、様々な立場の人が幸せになれるような「判断の規準」をつくり、多様な考えの中から、自身はどのように考えるのかを明らかにしていく。いわば「いかす」段階である。

## ② 普段から「判断の基準」や「判断の規準」を意識する

本年度、特に重点的に取り組んできたことが、この項目である。本校では、2006年から、社会的価値判断力や意思決定力を育む「市民」の学習として、資料3の様な他者との差異や葛藤をできるだけ生み出す場面を設定してきた。これを継承しつつ、社会的論争問題以外の社会的事象についても、自身がなぜそのように考えるのか、つまり、自身の「判断の基準」は何かについて触れるように時間をとり、お互いの「判断の基準」を聴き合う中で、その「判断の基準」の根っこにある価値や概念等は何かを考えることに取り組んできた。

### (4) 研究テーマ「学びをあむ」との関連

全体の研究理論にもあるように、主体的な学び手として“子ども自らが学びを構想し、他者と関わりながら探究する姿”が学びをあむ姿の1つとされている。

「社会」部では、社会的論争問題における「観点」を自分たちで想定し、その「観点」について見通しを持って調べ、自身の「判断の基準」を明らかにしていくこと、考えが異なる他者が納得できるような案を考えることが、子ども自らが学びを構想することと関連があると考えている。

異なる他者との対話により、一人では考えが及ばない発想や思考に触れ、お互いの考えが揺さぶられながら「判断の規準」に迫っていくこと、それを基に学びをふり返り、社会全体にとってよい「判断の規準」は何かを自身の中で見つめ直すことが、他者と関わりながら探究する姿だと考えている。

そして、社会に出た後にも、社会問題に関心を持ち、それを解決するためには、「観点」は何か。その「観点」に潜む「判断の基準」や「判断の規準」は何かを捉え、様々な立場の人が幸せになれるような条件を考えていく姿を期待している。

- (ア) 社会的論争問題に出会い、他者の異なる考えに触れる中で、その問題についての「観点」を洗い出す。
- (イ) 対話により、自身や他者の考えの背景にある具体的な「判断の基準」を明らかにする。
- (ウ) それぞれが考える「判断の基準」について具体的な根拠を調べ、さらに対話を通して、その基準に潜む価値や概念（「判断の規準」）を明らかにする。
- (エ) 判断の基準が異なる他者同士の対話により、様々な立場の人が幸せになれるような「判断の規準」は何かを吟味し、どのような判断をすればよいのか自身の考えを決定する。

資料2 政治的リテラシーを涵養する学習過程

#### 【タイプA】

時事的な社会的論争をともなう社会的事象の中で「他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う内容

#### 【タイプB】

仮想した問題を通して子ども同士の関係の中の「他者との差異や葛藤を感じる問題」を扱う内容

#### 【タイプC】

子どもがプランや提案を創造しながら「他者との差異を認め広げる」内容

資料3 社会的価値判断力や意思決定力を育む場面設定のタイプ

## 2 授業実践から見た子どもたちの学ぶ姿

(1) 題材名 私たちの暮らしと工業生産～自動車～ (第5学年)

### ① 学習計画

第1～2時…身のまわりの自動車は私たちにどのような関わりがあるかについて考え、それらがどのように生産されているかを考える。

第3～7時…消費者の需要に対してどのようにして優れた製品を生産しているかを調べる。本時2/5

第8～11時…社会の変化に対応し、どのような自動車が開発されているかを調べ、どのような自動車が今後必要になるかを考える。

### ② 4時の概要

本時は、消費者の需要に応える生産を行っていることを調べるために、消費者にはどのようなニーズがあり、そのニーズにはそれぞれが大切にする「判断の基準」があるということ子どもたちがつかむことができるようにするため、新車のオプションとして何を付けるかという課題を提示した。

自動車には様々なオプションがあり、それらを組み合わせると1万通りにもなるという。そこで、あらかじめ授業者が10種類のオプション(資料4)を提示し、金額の上限も設定し、そこから3つ程度子どもたちが選ぶようにした。

当然、子どもたちによって、何を選ぶかは様々で、そこには自身の「判断の基準」が存在する。そして、その根っこには自身が大切にする価値や概念等(「判断の規準」)がある。何をどういう理由で選んだのかを自分自身で意識させ、それを聴き合うことで、「判断の規準」に迫ることができるようにしたい。

### ③ 授業の実際

「ニュースで見たから、ドライブレコーダーは絶対につけたい。」という意見に対して、どうしてドライブレコーダーが必要かを質問し、「そもそも事故が起きないほうが大切なんだから、危ない時にブレーキをかけてくれるオプションの方が必要だと思う。」と他者の思いをくみ取り、そもそも何が大切かを考え、それに対して自分の意見を言う姿が見られた。また、「新車のニオイとかきついから、綺麗な空気にするオプションは絶対につけたい。」「リモコンでエンジンが作動するものが欲しかったが値段が高かったので、違うのをつけた。」など、快適性という「判断の規準」も垣間見えた発言があった。

子どもたちのふり返りを見ると、「僕は安全第一だったが、人によって違った。」「どれを一番の基準にするかによって欲しい順がきまる。僕は便利を一番にした。」というように、人によって大切にしたい「判断の規準」が違うことに気付いている。「ドライブレコーダーは事故そのものを防ぐことはできないのであまり必要ないと思いました。また歩行者のことを考えて安全を重視することも大切だと思いました。」というように様々な立場を想定している姿も見られた。また、「選び方は多く分けて2つあると思って、1つは安全、1つは快適さだと思います。私は安全重視で考えました。」というように、「判断の規準」を明確にし、そこから優先順位を付けて選ぶことが大切だと述べている。このような考えは、今後、社会全体にとってよい基準は何かを考える際に生きてくると考える。

(2) 単元名「タイムスリップするとしたら、縄文時代と弥生時代、どちらの時代にしたい?」(第6学年)

### ① 本単元の概要

歴史の学習において、価値判断を問う学習は難しいといわれている。既に結論が分かっているという見解からであろう。しかし、歴史の学習をただ調べて終わるだけの学習にしないためには、価値判断の場面を設定し、調べたことを自分の考えの根拠にし、他の友だちに向けて発信する学習に発展させることも取り入れてきた。本単元は、上に記した学習問題を子どもたちに問いかけ、縄文時代と弥生時代の

車を買うならどんなオプションをつける？			
みがく5年( )組( )番 名前( )			
オプション	説明	価格	
1	ドレスアップパネル	車の中を木目調に	21600
2	インテリアイルミネーション	キレイな明かりで車内を飾ります	16200
3	プラズマクラスター	車内の空気をキレイに	18792
4	リモートスタート	離れた所からリモコンでエンジンを動かし、冷暖房を付けれる	64800
5	スマートエントリーセット	簡単に車の中に入れる	34560
6	ドライブレコーダー	事故の様子を再生できる	21060
7	バックガイドモニター	駐車も楽々	29160
8	サイドエアバッグ	事故の時、サイドからもエアバック	43200
9	トヨタセーフティセンス	車がぶつかりそうになったら音で知らせる、はみ出しサポートなど	43200
10	インテリジェントクリアランスソナー	踏み間違え時に被害軽減サポート	28080

予算は、7万5000円です。付けたいものの欄に、欲しい順に番号を書きましょう。

資料4 オプション表

歴史的事実を、「観点」を決めて調べ比較し、「タイムスリップするならどちらの時代を選ぶのか」を判断するための多様な「判断の規準」から、より重要と考える「判断の規準」に基づいて思考し最終的な意思決定を行うという授業構成で実践した。

## ② 指導計画

第1時 縄文時代と弥生時代の想像図を見て、タイムスリップしたい時代を判断し意見交換する。

第2時 自分が調べたい「観点」に基づいて、両時代を調べ比較する。

第3・4時 縄文時代と弥生時代について、様々な「観点」から調べた事実を出し合い、事実に対して意味付けを行う。(→「判断の規準」が出てくる。)

第5・6時 「縄文時代と弥生時代、どちらにタイムスリップしたいか」について多様な「判断の規準」から、より重要と思う「判断の規準」に基づいて意見を述べ合い、最終的な意思決定を行い、自分の考えを書く。

## ③ 実際の授業の流れ(子どもたちの活動と思考の流れ)

ア、第3・4時 「食べ物」「衣服」「建物」「道具」「争い」などの「観点」を基に、わかったことや気づいたことを話し合った。様々な事実を発表し合う時、ただ事実を発表する話し合い活動で終わらせるのではなく、事実に対する意味づけを行った。そのことは、その事実にどのような隠れた価値や概念があるのかを浮きだたせ、次の話し合いにおける「判断の規準」となっていた。※以下はその例である。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・狩猟や木の実の採集→より自然に触れている</li> <li>・縄文土器の中の火焰土器→芸術性がある・衣服に模様有り→おしゃれ・狩猟での争いはあるが人との争いはない→平和</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米づくりが始まる→食の安定・弥生土器は薄くて固い→実用的・衣服がシンプル→動きやすい</li> <li>・矢板、石包丁、田下駄→便利→暮らしが豊か</li> <li>・かしら(指導者)の出現→不平等・身分の差</li> </ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

イ、第5・6時 第3・4時で出された「判断の規準」は、「食の安定」「食のバランス」「便利」「芸術性」「実用的」「平和」「協力」などであった。その「判断の規準」に基づいて話し合いが行われた。右記はその一部である。話し合いの最後には、「食の安定はないが、みんなが協力し合える平和な縄文時代がよい」のか、「人間同士の争いはあるが、日々食に困らない最低限の生活が保障された弥生時代がよい」のかについて、議論が絞られてきた。米づくりは食を安定させたが、それによって米などの奪い合いのために争いが起こった。進歩が必ずしも良いことばかりではないという見方をこの話し合いから子どもたちは学んでいくことができた。

【例】縄文時代は、毎日が食料集めに追われる事になる。一方、弥生時代はその必要がなく、住居も一定の場所になり生活が落ち着いた事で、技術にも進歩がみられる。  
 【例】確かに、縄文時代の食は安定していないけど、自然のものを取り過ぎないという食を大切に守るルールを守って生活している。(中略)  
 【例】弥生時代は、米づくりで食は安定してきたけれど、米づくりが始まったことで米などの奪い合いのために争いが起こった。争いが起きるといことは、衣食住が安定しなくなるということにつながるのではないか。また、縄文時代は争いがなかったため、平和なのだと思う。  
 【例】弥生時代は水、土地、米、農具などの奪い合いのために争いがあつたが、縄文時代も、動物との争いがあるので、決して平和とはいいいきれないと思う。

## ④ 考察

上記の□内の子どもたちの発言を改めて見ると、現代や未来の社会でも、考えるべき価値に気がつくことができたのである。歴史的な学習でも、「政治的リテラシー」を涵養するために、「判断の規準」を意識させることで、現代や未来の社会を創造していく時に重要視した方がよい価値を、子どもたちは考え創造することができるのである。ここに、政治単位だけでなく、歴史単位においても「判断の規準」について学ぶ意義が存在すると考える。

## 3 今後に向けて

年間を通して、社会的論争問題を学習材としない授業でも、授業者が意識して取り組むことで、「判断の基準」や「判断の規準」に触れることができた。このことが、論争問題学習においてどのような効果をもたらしたのか、子どもたちがどのように生かしているのかを姿から見とる必要がある。

(岩坂・佐藤)